

富山市内遺跡発掘調査概要 V

—砂川カタダ遺跡・今市遺跡—

2011

富山市教育委員会

富山市内遺跡発掘調査概要 V

—砂川カタダ遺跡・今市遺跡—

2011

富山市教育委員会



調査区遠景（西から）



調査区完掘（東から）



遠景（北から）



近景（東から）

例　　言

- 1 本書は、個人住宅建築に先立つ平成 22 年度富山市内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、富山市教育委員会が主体となって実施した。調査費用については、富山市が国庫補助金・県費補助金の交付をうけた。
- 3 本書で報告する遺跡の名称・現地調査期間・整理作業期間及び発掘調査面積は次のとおりである。

砂川カタダ遺跡	発　掘　作　業：平成 22 年 6 月 23 日～7 月 16 日	144.6 m ²
(富山市東老田地内)	整理等作業：平成 22 年 7 月 17 日～平成 23 年 3 月 31 日	
今市遺跡	発　掘　作　業：平成 22 年 8 月 25 日～9 月 30 日	190 m ²
(富山市寺島地内)	整理等作業：平成 22 年 10 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日	
- 4 調査担当者
砂川カタダ遺跡 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
 - 主査学芸員 細辻嘉門 嘴託 連沼優介
今市遺跡 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
 - 主査学芸員 鹿島昌也 嘴託 長谷部真吾、小林高太
- 5 現地発掘調査及び資料整理に際し、下記の諸氏・諸機関のご指導・ご協力をいただいた。記して謝意を表します。(五十音順、敬称略)
久々忠義、酒井重洋、高岡徹、高梨清志、寺島町内会、富山県教育委員会生涯学習・文化財室、富山県埋蔵文化財センター、東老田町内会
- 6 出土遺物・原図・写真類は富山市教育委員会が保管している。
- 7 本書の執筆・編集は細辻・鹿島・長谷部が行った。文責は文末に記した。

凡　　例

- 1 本書で用いた座標は世界測地系に準拠した。方位は真北、水平基準は海拔である。
- 2 砂川カタダ遺跡中、層序および遺物観察表で記載した色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1994 年版』に掲る。
- 3 遺構記号は溝：S D、土坑：S K、ピット：S P、その他の遺構：S X を用いた。
- 4 砂川カタダ遺跡報告図版中の網掛は、以下のとおりである。

地山  須恵器・珠洲の断面 

目 次

I 砂川カタダ遺跡	1 ~ 15
第1章 調査の経過	2
第1節 調査にいたる経過	
第2節 発掘作業及び整理等作業の経過	
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 調査の方法と成果	3 ~ 5
第1節 調査の方法	
第2節 基本層序	
第3節 遺構	
第4節 遺物	
第4章 総括	6 ~ 7
<引用・参考文献>	7
II 今市遺跡	16 ~ 34
第1章 調査の経過	16
第1節 調査にいたる経過	
第2節 発掘作業及び整理等作業の経過	
第2章 遺跡の位置と環境	16 ~ 18
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3章 調査の方法と成果	19 ~ 21
第1節 調査の方法	
第2節 基本層序	
第3節 遺構	
第4節 遺物	
第4章 総括	27 ~ 28
<引用・参考文献>	18

挿図目次

図 1 周辺の遺跡分布図	2	図 8 今市遺跡の位置と周辺の遺跡分布図	17
図 2 調査区位置図	2	図 9 調査区全体図及び西壁十層図	22
図 3 調査区全体図及び層序模式図	8	図 10 SD01 及び SK06 平面図・断面図	23
図 4 遺構平面図・遺物出土状況図及び断面図	9	図 11 遺構平面図及び断面図	24
図 5 遺構平面図及び断面図	10	図 12 遺物実測図（1）	25
図 6 遺物実測図	11	図 13 遺物実測図（2）	26
図 7 調査区位置図	16	図 14 寺島地区旧地割図に見える字割り	28

表目次

表 1 遺構一覧表	4	表 3 遺構一覧表	20
表 2 遺物観察表	6	表 4 遺物観察表	21

写真図版目次

図版 1 航空写真	12	図版 6 遺構写真	30
図版 2 遺構写真	13	図版 7 遺構写真	31
図版 3 遺構写真	14	図版 8 遺構写真	32
図版 4 出土遺物写真	15	図版 9 出土遺物写真	33
図版 5 航空写真・調査区遠景	29	図版 10 出土遺物写真	34
報告書抄録			35

I 砂川カタダ遺跡

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

砂川カタダ遺跡は昭和 63 年度～平成 3 年度に富山市教育委員会が実施した分布調査で確認され、遺跡地図に遺跡 No. 201284 として登載された。埋蔵文化財包蔵地の面積は 74,000 m² である。

平成 22 年 4 月 1 日、富山市東老田地内において、個人住宅建設について照会があった。建設予定地全城 330 m² が埋蔵文化財包蔵地（砂川カタダ遺跡）に含まれていたため、同年 5 月 6 日に試掘調査を実施したところ、弥生時代・古代の上坑・溝・ピットや、弥生土器・土師器を検出し、建設予定地全域に埋蔵文化財の所在を確認した。試掘調査の結果に基づき、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。地盤改良工事が遺構面に達することから、住宅建築部分と擁壁部分 144.6 m² について発掘調査を行うこととなった。

第2節 発掘作業及び整理等作業の経過

発掘作業は平成 22 年 6 月 23 日から同年 7 月 5 日まで行なった。表土掘削は平成 22 年 6 月 23 日にバックホウを用いて行った。表土除去完了後の 6 月 25 日から人力による包含層掘削・遺構検出手作業を行い、その後遺構掘削作業を開始した。遺構掘削作業と並行して随時写真撮影・測量・図面作成作業を行った。7 月 15 日には遺構掘削を終え、ラジコンヘリコプターによる空中写真と全景写真を撮影し、7 月 16 日調査を完了した。

遺物整理・報告書作成作業は、現地調査終了後埋蔵文化財センターで実施した。業務内容は遺物洗浄・注記・接合・実測の他、報告書作成である。平成 23 年 3 月 31 日に報告書を刊行し、完了した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

砂川カタダ遺跡(1)は富山市街地から南西約 11 km の富山市東老田地内に所在する縄文・弥生・奈良・平安・中世にわたる集落遺跡である。東老田地区は呉羽山丘陵西側に広がる射水平野の南奥部に位置し、背後にはなだらかな射水丘陵が控える。集落の西側を鍛治川が北流する。調査区付近の標高は約 7 m である。

第2節 歴史的環境

本遺跡では、平成 17 年度に今回調査区の南 200m で個人住宅建築に先立ち発掘調査が実施されている。調査では、古代に形成された溝を検出し、弥生土器・土師器・須恵器・鉄滓が出土した。〔富山市教育委員会 2006〕

本遺跡が立地する呉羽丘陵西部から射水丘陵東部にかけては、奈良・平安時代の越中における手工業生産（製陶・製鉄・製炭）の中心地帯であり、遺跡の周囲半径 1.5 km 以内に生産遺跡が点在する。本遺跡の南西 1.5 km には市史跡柄谷南遺跡(2)がある。7 世紀中頃～8 世紀にかけて操業した瓦陶兼業窯で、須恵器・土師器・製鉄関連の遺物のほか 200 点以上の軒丸瓦が出土し、古代越中における窯業生産の歴史や仏教文化の浸透の様相を解明する上で重要な遺跡である〔富山市教育委員会 2002〕。

中・近世の遺跡としては北 1.5 km に願海寺城跡(3)がある。上杉謙信方の武将寺崎民部左衛門が拠った城として『上杉家文書』『信長公記』『越後賀三州志』故墟考「加越能三州地理志稿」『越中志徵』などに願海寺城の名前が見え、寺崎氏については「越中志徵」などにも多く語られる。

平成 14 年の発掘調査では室町～戦国期の郭を巡る二重の堀・土橋・井戸跡が検出され、平成 16 年の発掘調査では戦国～安土桃山期の区画溝・土坑・小ピットが検出された。これらの調査結果を元に願海寺城下町が推定されている。〔富山市教育委員会 2003・2005、古川 2005〕

I 砂川カタダ遺跡



図1 周辺の遺跡分布図 (S=1/25000)



図2 調査区位置図 (S=1/5000)

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

発掘調査は、最初に耕作土を試掘調査の結果をふまえながら遺構検出面直上までバックホウにより掘削・除去した。その後、遺構検出面から人力による掘削を行った。

包含層がほとんど残存していなかったため、ただちに遺構検出、遺構掘削を行った。遺構は断面観察用の畦を残して掘削した後、ピットや小さな土坑は半載した後、断面を写真と図面に記録し、遺物が出土した遺構は、遺物出土状況写真と図面に記録した後、完掘した。遺物はトータルステーションを使用して位置と高さを記録した。

図面は、平面図・断面図・遺物出土状況図とも縮尺20分の1を基本として作成した。

カメラは現地調査では35mm・プロニー(6×7)サイズを使用し、フィルムはカラーリバーサルと白黒を使用した。遺物写真は、4×5サイズを使用し、フィルムは白黒を使用した。

第2節 基本層序(図3)

調査区の基本層序は、調査区壁面を用いて観察を行った。調査区の土層は、部分的に見られる耕作等による搅乱を除き、大まかに以下の3層に分けることができる。今回の調査では、Ⅲ層の上面で遺構検出を行なった。同一検出面のため、遺物が出土しない遺構は時代を特定できなかった。

I層：暗褐色粘質土(耕作土・表土)層厚15~30cm

II層：黒褐色粘土(遺構埋土・遺物包含層)

III層：にぶい黄橙色粘土(地山)

第3節 遺構(図3~5、表1、写真図版2・3)

検出された遺構は、弥生時代終末の溝2本・土坑3基・ピット1基、古代の土坑2基、時期不明の溝・土坑・ピットなど計53基ある。主な遺構の概要は以下のとおりである。

1 溝

S D 0 2 調査区南端を東から西へ流れる。検出長5・55m、幅0.7m、深さ0.24mで、平面形は引き伸ばしたS字状を呈する。断面は台形を呈する。東側はSK3に切られる。遺構埋土は2層である。上層は炭化物等を含み、弥生土器が出土する。遺物の出土する高さは一定ではない。下層は地山の土に埋土が粒状に混じり、築り不良である。溝が構築されて間もなく一度埋まり、遺構廃絶の際一気に堆積したと考えられる。

出土遺物は弥生土器壺等が出土した。遺物の時期から、弥生時代終末と考えられる。

S D 0 5 調査区中央で検出した。検出長7.15m、幅0.35m、深さ0.08mで、平面形は不整形を呈する。断面はゆるい船底形を呈する。南端はSD2に切られ、北端はSK5.6を切っている。遺構埋土は単層である。深さが浅く、遺構の残存状況は非常に悪い。後世の削平を受け、溝底部のみが残っていると考えられる。

出土遺物は、弥生土器壺・鉢がある。SD02に切られており、出土遺物の時期からみて弥生時代後期後半～終末に帰属すると考えられる。

2 土坑

S K 2 0 楕円形を呈する。長軸0.82m、短軸0.7m、深さ0.4m。断面は不整形である。遺構埋土は単層で、遺構廃絶後一気に堆積したと考えられる。遺構中央部に柱痕跡あるいは柱の当りの痕跡を確認した。出土遺物は弥生土器壺・高杯等が出土した。

S K 2 3 円形を呈する。長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.47m。断面はU字型である。遺構埋土は2層で、遺構が構築されて間もなく一度埋まり、その後一気に堆積したと考えられる。柱根・柱痕跡は確認できない。出土遺物は弥生土器蓋が出土した。

遺構 番号	平面形態	長軸 (m) (検出長)	短軸 (m) (検出長)	深さ (m) (検出長)	断面形態	出土遺物	備考
SD 0 2	S字状	5.55	0.7	0.24	台形	弥生土器	調査区南端と西端に切られる。 SK 0 3 に切られる。
SK 0 3	不整形	2.25 (検出長)	1.15 (検出長)	0.08	船底形	不明土器	西側が SD 0 2 を切っている。 調査区南端に切られる。
SK 0 4	隅丸方形	2.2 (検出長)	1.55 (検出長)	0.21	台形	須恵器・土師器・土錐	南端と東端は調査区外へ続く。 SK 35 を切っている。
SD 0 5	曲線	7.15	0.35	0.08	船底形	弥生土器	南端を SD 0 2 に切られる。 北端を SK 5 6 を切っている。
SK 0 6	横円形	0.48	0.25	0.14	船底形		
SP 0 7	円形	0.36	0.3	0.22	U字形		
SP 0 8	円形	0.29	0.26	0.14	台形		
SP 0 9	横円形	0.47	0.37	0.18	音形		
SK 1 0	(楕円) (検出長)	0.53 (検出長)	0.39 (検出長)	0.1	台形		
SP 1 1	円形	0.33	0.32	0.12	台形		
SK 1 2	円形	0.55	0.55	0.17	台形		
SK 1 3	円形	0.55	0.45	0.08	船底形		
SK 1 4	円形	0.8	0.77	0.11	船底形		
SP 1 5	円形	0.31	0.25	0.11	船底形		
SP 1 6	円形	0.3	0.24	0.16	U字形		
SP 1 7	円形	0.3	0.27	0.4	U字形		
SP 1 8	円形	0.32	0.3	0.06	船底形		
SP 1 9	円形	0.3	0.25	0.14	台形		
SK 2 0	横円形	0.82	0.7	0.4	不整形	弥生土器	
SP 2 1	円形	0.35	0.25	0.2	U字形		
SK 2 3	円形	0.6	0.5	0.47	U字形	弥生土器	
SP 2 4	円形	0.34	0.34	0.25	台形		
SP 2 5	円形	0.35	0.3	0.14	不整形		
SP 2 7	円形	0.3	0.3	0.26	U字形	SP 28 を切っている。	
SP 2 8	(円形) (検出長)	0.25 (検出長)	0.21 (検出長)	0.21	U字形	SP 27 に切られている。	
SP 2 9	横円形	0.4	0.3	0.08	船底形		
SP 3 0	円形	0.25	0.22	0.1	台形		
SP 3 1	円形	0.25	0.2	0.16	U字形		
SP 3 2	円形	0.26	0.25	0.06	船底形		
SK 3 3	楕円形	1	0.57	0.27	不整形		
SP 3 4	楕円形	0.3	0.25	0.1	U字形		
SK 3 5	(楕円) (検出長)	1 (検出長)	0.95 (検出長)	0.16	船底形	SK 0 4 に切られる。	
SP 3 6	円形	0.3	0.24	0.13	台形		
SK 3 7	楕円形	0.7	0.5	0.31	台形		
SP 3 8	円形	0.28	0.23	0.24	U字形		
SP 3 9	円形	0.24	0.2	0.29	U字形		
SK 4 0	円形	0.48	0.48	0.06	船底形		
SP 4 1	横円形	0.4	0.3	0.17	不整形		
SK 4 2	円形	0.48	0.48	0.1	台形	不明土筋	
SK 4 3	横円形	0.9	0.5	0.11	台形		
SK 4 4	不整形	1	0.9	0.08	船底形		
SP 4 5	(楕円形) (検出長)	0.27 (検出長)	0.23 (検出長)	0.2	U字形		
SK 4 6	横円形	0.87	0.65	0.33	不整形	弥生土器	南端は SK 5 6 を切っている。
SK 4 7	横円形	0.75	0.5	0.29	台形		
SP 4 8	円形	0.28	0.21	0.18	U字形	弥生土器	
SK 4 9	(円形) (検出長)	0.26 (検出長)	0.1	0.15	U字形		
SP 5 0	円形	0.33	0.33	0.54	U字形		
SP 5 1	円形	0.25	0.23	0.23	台形		
SP 5 2	円形	0.27	0.22	0.18	台形		
SP 5 3	円形	0.37	0.32	0.12	U字形		
SP 5 4	円形	0.34	0.32	0.1	船底形		
SK 5 5	(楕円形) (検出長)	0.56 (検出長)	0.5	0.09	船底形	須恵器・土師器	
SK 5 6	不整形	3.3	1.1	0.29	台形		北側を SK 5 6 に切られている。 南側を SD 0 5 に切られている。

表1 遺構一覧表

SK 4 6 円形を呈する。直径 0.35 m、深さ 0.2 m。断面は U 字型である。遺構埋土は 3 層で、地山混じりの埋土が堆積した後、黒色土が堆積していると考えられる。柱を抜き取った後堆積した可能性も考えられる。柱根・柱痕跡は確認できない。出土遺物は弥生土器がある。

S K O 3 不整形を呈する。長軸 2.25 m、短軸 1.15 m、深さ 0.08 m。断面は船底形である。西端は S D 2 を切っている。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。貼床や硬化面、柱痕などは確認できない。出土遺物は、時期不明の土器がある。

S K O 4 溝丸方形を呈する。長軸 2.2 m、短軸 1.55 m、深さ 0.21 m。断面は台形である。南と東は調査区端で切られている。遺構埋土は単層で、一気に堆積したと考えられる。貼床や硬化面、柱痕などは確認できない。出土遺物には須恵器・土器・土錐がある。

S K 5 5 構円形を呈し、東側が暗渠排水埋設の際に壊されている。長軸 0.58 m、短軸 0.5 m、深さ 0.09 m。断面は船底形である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。焼土や硬化面などは確認できない。出土遺物には須恵器・土器がある。

3 ピット

S P 2 7 円形を呈する。直径 0.3 m、深さ 0.26 m。断面は U 字型である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。柱痕等は確認できない。出土遺物には鉄石英の破片がある。

S P 4 8 円形を呈する。直径 0.28 m、深さ 0.18 m。断面は U 字型である。遺構埋土は単層で、自然堆積と考えられる。柱痕等は確認できない。出土遺物には弥生土器器台脚部がある。

第4節 遺物（図 6、表 2、写真図版 4）

今回の調査では、弥生土器・須恵器・土器・珠・近世陶磁器などがコンテナボックス（60cm × 40cm × 10cm）に換算して 4 箱出土した。全体的に細かい破片が多く、実測不可能なものが多数を占める。主要な遺構から出土した遺物の詳細については次のとおりである。

S D O 2 1～6 は弥生土器である。1 は擬円線のある有段口縁甕である。長めの外反する頸部に外反・外傾する口縁部が付く。段の屈曲は強い。口縁端部が欠損している。擬円線を 5 条以上施す。指頭圧痕、頸部から下の調整は確認できない。煤・炭化物は付着しない。2・3 は有段口縁甕である。どちらも段の屈曲は弱く、2 の口縁端部はまっすぐで短くつまみあげ、丸くおさめる。3 の口縁端部はわずかに外反しながらたちあがり、丸くおさめる。擬円線・煤・炭化物は確認できない。4 は「く」の字状口縁甕で、口縁端部を面取りする。頸部が強く屈曲、外反する。内外面とも調整は確認できない。煤・炭化物の付着は確認できない。5・6 は甕か壺の底部である。5 は底径 4.4 cm で外反し、外面は縱方向、内面は左斜め方向にハケを施す。煤・炭化物は付着しない。倒卵形の胴部になると考えられる。6 は底径 6.0 cm で、内溝し、外面は左斜め方向にハケを施す。内面の調整は確認できない。煤・炭化物は付着しない。球形の胴部になると考えられる。

S D O 5 7・8 は弥生土器である。7 は有段口縁の甕である。8 は有段口縁の鉢である。口縁部を短くつまみ出して外反させる。球形の胴部を持つと考えられる。

S K O 4 16 は須恵器壺 A である。17 は土錐である。外面は摩滅によりやや丸みを帯びている。上下端部が欠損して判別し難いが細辯真澄氏分類の壺型 C に該当する。

S K 2 0 9～11 弥生土器である。9 は有段口縁甕で 3 条の擬円線を施す。10 は高壺か器台の棒状有段脚の端部で赤彩は確認できない。11 は甕か壺の底部である。

S K 2 3 12 は弥生土器である。蓋のツマミ部で、口径 4.0 cm を測る。ツマミ部の上部は凹んでいる。外面はハケ後ミガキ、内面はハケで調整する。

S K 4 6 13・14 は弥生土器である。13 は甕口頸部で口縁部が欠損する。内面は横方向のハケで調整する。14 は甕か壺の底部である。

S P 4 8 15 は弥生土器器台脚部である。棒状で、裾部に向かって緩やかに外反する。外面はヘラ磨きを施す。内面の調整、赤彩は確認できない。

包含層その他 表土直下の黒色土から出土した。18～21 は弥生土器である。22 は須恵器である。

番号	出土地点	剖面			土質		色調		成形・調整		備考	
		基盤	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	質	砂粒	底成	内面	外面		
1	SD2	弥生土器・壺	-	-	-	やや密	1~4mm	良	10YR8/2 灰白	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	調整不明	口縁部縦凹線 5 条以上
2	SD2 No.43	弥生土器・壺	16.0	-	-	やや疏	1mm	良	10YR7/4 にぶい黄褐色	10YR3/1 灰褐色	ナデ	ナデ 外面の一部 10YR5/3 にぶい黄褐色
3	SD2 No.5	弥生土器・壺	15.0	-	-	やや密	1mm 少量	良	N5/ 灰色	N6/ 灰色	ナデ	ナデ
4	SD2 No.22	弥生土器・壺	17.2	-	-	密	2mm 多量	不良	7.5YR7/6 褐色	SYR6/6 褐色	調整不明	調整不明
5	SD2 No.42	弥生土器	-	-	4.4	やや密	2mm 少量	良	10YR4/1 褐色	10YR6/1 褐色	ハケ	ハケ 内面の一部 7.5YR5/8 明黄色 外表面の一部 10YR7/3 にぶい黄褐色
6	SD2	弥生土器	-	-	6.0	やや密	2~3mm 多量	良	10YR7/2 にぶい黄褐色	10YR5/1 褐色	調整不明	ハケ
7	SD5 ベルト	弥生土器・壺	12.0	-	-	密	1~2mm 少量	良	10YR7/2 にぶい黄褐色	10YR5/3 淡黃褐色	ナデ	ナデ
8	SD5 No.4	弥生土器・鉢	11.9	-	-	やや疏	1~2mm 少量	不良	10YR8/3 淡黃褐色	10YR8/3 淡黃褐色	調整不明	調整不明
9	SK20	弥生土器・壺	20.0	-	-	やや疏	1~3mm 多量	良	10YR3/1 灰褐色	10YR7/2 にぶい黄褐色	ナデ	ナデ 内面の一部 10YR6/8 明黄色
10	SK20	弥生土器・高杯形台座	16.0	-	-	密	1~2mm 少量	良	10YR4/1 褐色	10YR7/2 にぶい黄褐色	調整不明	ミガキ? 明黄色
11	SK20	弥生土器	-	-	4.0	やや疏	1~2mm 多量	良	10YR7/4 にぶい黄褐色	SYR6/6 褐色	調整不明	ハケ 外面の一部 10YR4/2 灰褐色
12	SK23	弥生土器・盆	-	-	-	やや疏	2~4mm 多量	良	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	7.5YR6/4 にぶい黄褐色	ハケ→ナデ	ハケ→ミガキ 洗み凹凸 4.0cm
13	SK46	弥生土器・壺	-	-	-	密	1~2mm	良	10YR8/2 灰白	10YR8/4 にぶい黄褐色	ハケ	調整不明
14	SK46	弥生土器	-	-	4.0	密	1~2mm	良	10YR7/1 灰白	10YR8/4 にぶい黄褐色	調整不明	調整不明
15	SP48 No.1	弥生土器・容器	-	-	-	密		良	10YR8/3 淡黃褐色	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	調整不明	ヘラミガキ
16	SK4	須恵器・杯 A	-	-	8.0	密		良	10YR6/1 褐色	2.5Y7/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ
17	SK4	土器	高さ 5.9	幅 3.1	厚さ 3.1	密		不良	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白		孔径 1.3cm 重量 35g
18	X 65.38 Y 27.63 Z 6.087	弥生土器・壺	13.8	-	-	やや疏	2mm	やや疏	SYR7/5 褐色	SYR6/4 にぶい黄褐色	調整不明	ハケ 内面 ハガレ
19	X 62.42 Y 27.35 Z 6.096	弥生土器	-	-	5.0	やや密	1~2mm 少量	良	10YR8/3 淡黃褐色	10YR8/3 淡黃褐色	調整不明	調整不明 外面の一部 10YR6/4 にぶい黄褐色
20	包含層 X 59.45 Y 23.06 Z 6.091	弥生土器・高杯?	-	-	5.4	密		良	10YR8/3 淡黃褐色	10YR8/3 淡黃褐色	調整不明	調整不明
21	包含層 X 65.36 Y 27.67 Z 6.087	弥生土器	-	-	6.0	やや密	1~5mm	良	10YR6/1 褐色	10YR7/3 にぶい黄褐色	ハケ	調整不明
22	包含層 X 61.43 Y 25.26 Z 6.04	須恵器・壺?	20.8	-	-	密		良	SY7/1 灰白	SY5/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ

表2 遺物観察表

第4章 総括

今回の調査では、弥生時代後期後半～終末期・古代の集落を確認した。調査区は耕作や暗渠埋設による削平を受けており、表土以下の堆積が薄く、遺構の残りが悪かった。また、同一の遺構検出面であり時期による遺構埋土の違いもないとため、遺物が出土しない遺構は時期の特定ができなかった。

調査区南端で検出した SD 02 は、調査区端で切られているため全容はつかめないが、平面形は鍵の手状あるいは S 字状に屈曲している。東から西に向かって深くなつておらず、特殊な用途に用いられた可能性もある。断面は台形を呈し、堆積を観察すると一度に埋まって廃絶したと考えられる。時期は弥生時代終末期に帰属する。

調査区東寄りでは弥生時代の土坑を 3 基検出した。このうち SK 20 には柱痕跡が確認でき、SK 23 も柱痕跡は確認できないが、柱穴と考えられる。SK 46 も含めると、3 基とも同じ規模・堆積であるが、SK 20・SK 23 間は 4.7 m、SK 20・SK 46 間は 2.4 m 離れており、掘立柱建物などの遺構の可能性は低いと推測される。時期はおおむね弥生時代後期後半～終末期に帰属する。

調査区東南端で検出した SK 04 は、調査区端で切られているため全容はつかめないが、平面形は

隅丸方形を呈する。床面は平らであるが、柱穴・炉跡・焼上・貼床などは確認できない。断面観察でも造構理土に炭化物等は確認できない。このため、竪穴建物など人が居住する施設であった可能性は低いと推測される。遺物は須恵器壺A・土錐が出土した。平安時代に帰属する。

砂川カタダ遺跡では、過去に今回調査区の北隣でも個人住宅建築による発掘調査が実施され、弥生時代終末・古代・中世の遺構が確認されている。

また、今回調査区から北東に900m離れた東老田I遺跡では、平成17年度の発掘調査で古墳時代中期の集落が確認されている。このため、今回調査区周辺にあった弥生時代終末期の集落は、古墳時代には東に移動したのではないかと考えられる。

今回の調査では、遺構、出土遺物ともわずかであるが、東老田地区に広がる弥生・古代集落を構成していた遺構を確認し、明らかにすることができた。
(細辻)

<引用・参考文献>

- 大野英子 2003「第4章まとめ 2遺物について」『富山県婦中町 鎌治町遺跡発掘調査報告』婦中町教育委員会
- 小杉町教育委員会 1999「H S - 04 遺跡発掘調査報告」
- 富山市教育委員会 1999「柳谷南遺跡」富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ
- 富山市教育委員会 2002「富山市柳谷南遺跡発掘調査報告書Ⅱ」富山市埋蔵文化財調査報告124
- 富山市教育委員会 2002「富山市柳谷南遺跡発掘調査報告書Ⅲ」富山市埋蔵文化財調査報告125
- 富山市教育委員会 2003「富山市内遺跡発掘調査概要Ⅴ一水橋二杉遺跡・願海寺城跡・北代遺跡一」富山市埋蔵文化財調査報告129
- 富山市教育委員会 2005「富山市願海寺城跡発掘調査報告書」富山市埋蔵文化財調査報告144
- 富山市教育委員会 2006「富山市内遺跡発掘調査概要Ⅰ一砂川カタダ遺跡・西二俣遺跡一」富山市埋蔵文化財調査報告10
- 富山市教育委員会 2006「富山市東老田I遺跡発掘調査報告書」富山市埋蔵文化財調査報告12
- 富山市教育委員会 2007「富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ一水橋寺光寺遺跡・宮町遺跡・鎌治町遺跡一」富山市埋蔵文化財調査報告20
- 富山市教育委員会 2008「富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ一若竹町遺跡・富崎遺跡一」富山市埋蔵文化財調査報告25
- 富山市教育委員会 2009「富山市内遺跡発掘調査概要Ⅳ一水橋上砂子坂遺跡・小竹貝塚一」富山市埋蔵文化財調査報告33
- 富山県教育委員会 1994「富山県埋蔵文化財センター年報 平成5年度」
- 婦中町教育委員会 2003「富山県婦中町 鎌治町遺跡発掘調査報告」
- 古川知明 2005「願海寺城下町の推定」『富山市願海寺城発掘調査報告書』富山市埋蔵文化財調査報告
144 富山市教育委員会
- 文化庁文化財部記念物課 2010「発掘調査のてびき」
- 細辻真澄 2001「任海宮II遺跡の土錐について」『富山考古学研究』紀要第4号 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 細辻真澄 2003「任海宮田遺跡の土錐について2」『富山考古学研究』紀要第6号 財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所
- 八尾町教育委員会 1997「翠尾I遺跡発掘調査報告書1」八尾町埋蔵文化財調査報告第11集

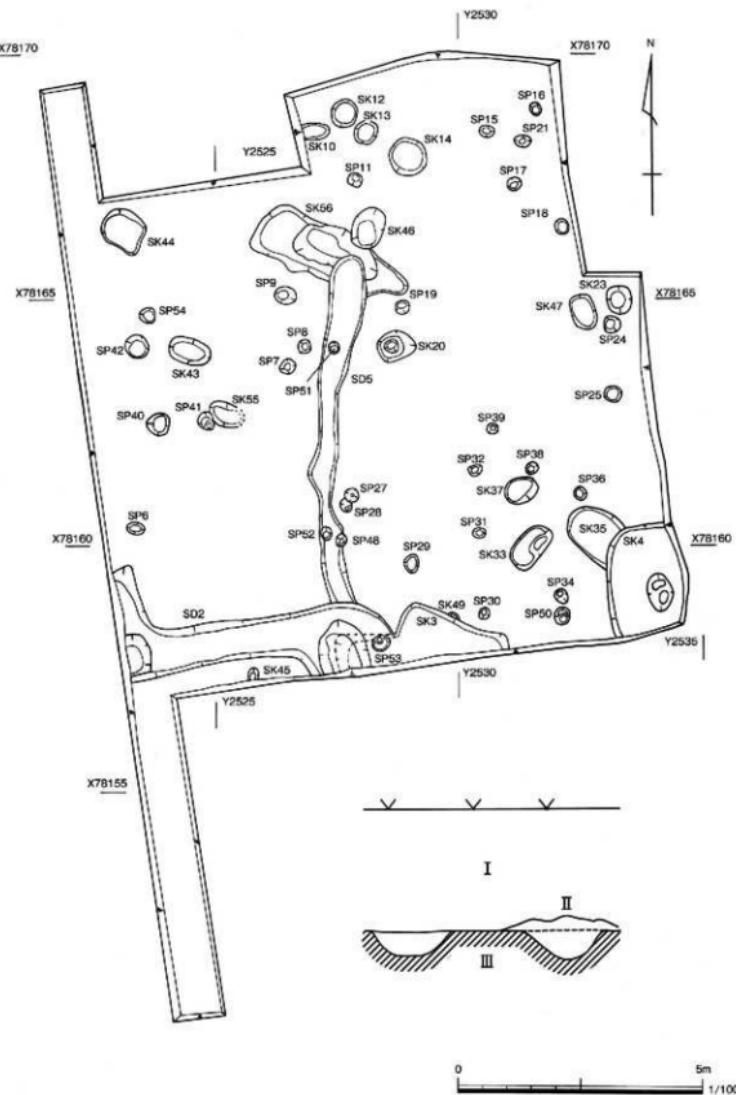


図3 調査区全体図 (S=1/100) 及び層序模式図

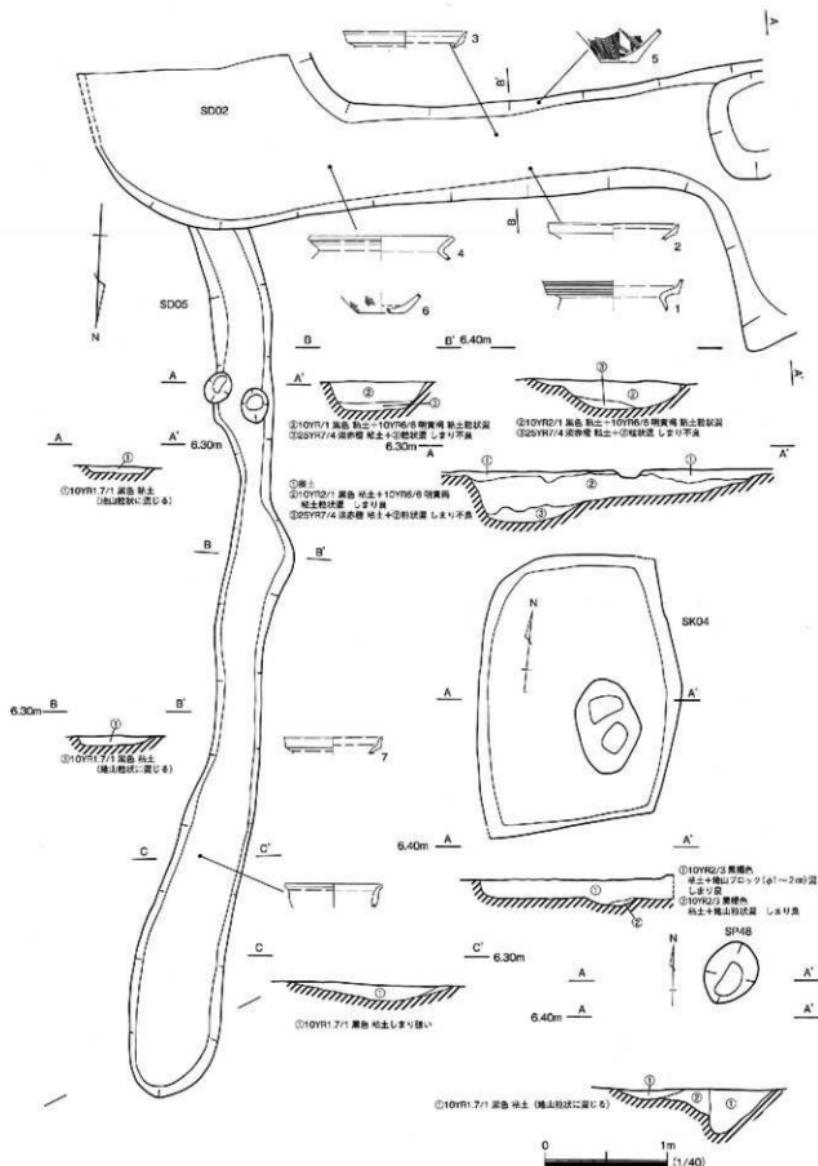


図 4 遺構平面図・遺物出土状況図及び断面図 (S=1/40、遺物実測図は S=1/6)

I 砂川カタダ遺跡

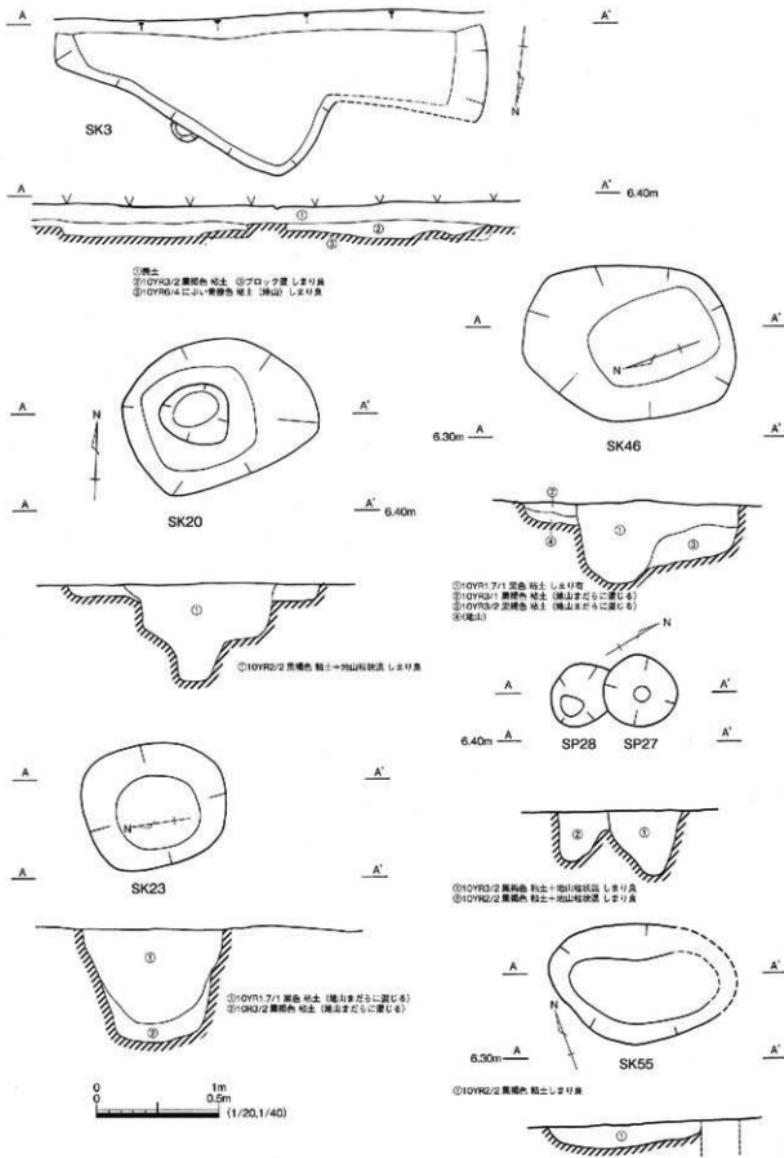


図 5 遺構平面図及び断面図 (SK 03 は S=1/40、他は S=1/20)

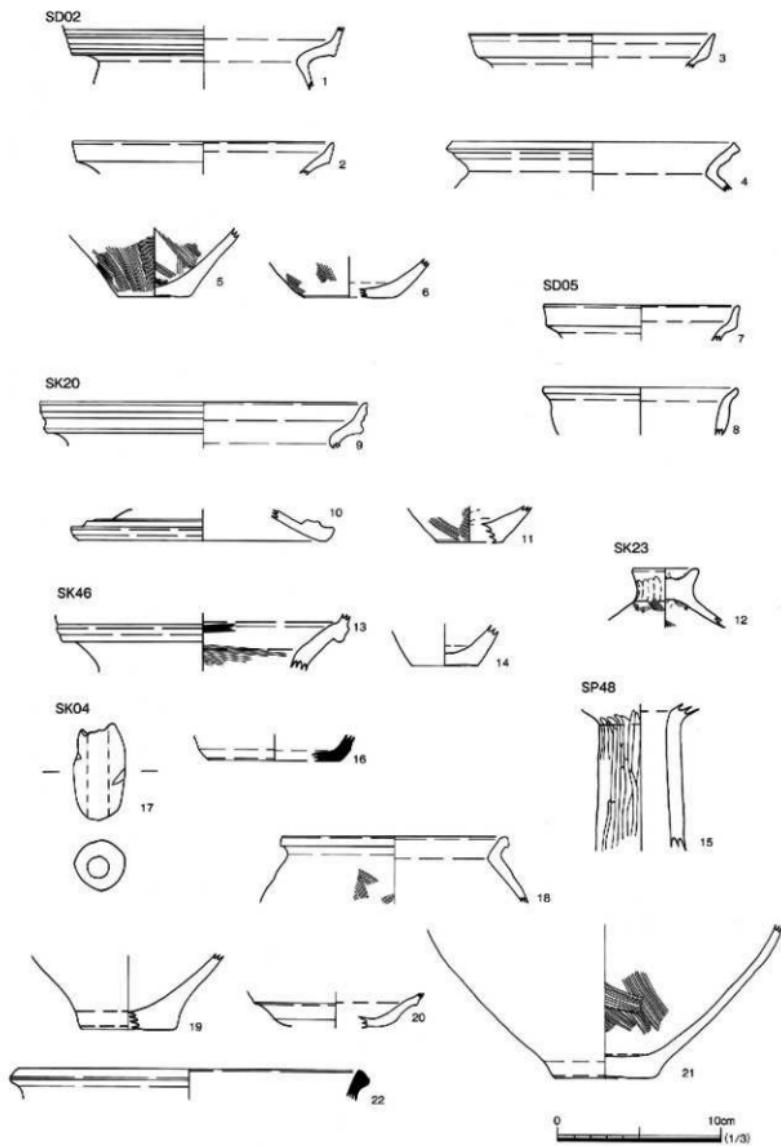


図6 遺物実測図 (S=1/3)



航空写真（1961年 国土地理院撮影）



遺構検出状況（東から）



遺構検出状況（南東から）



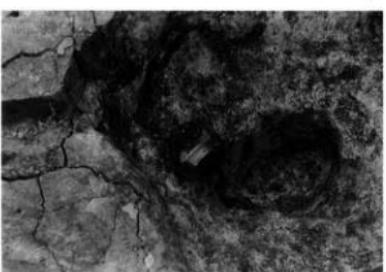
SD02 検出状況（北から）



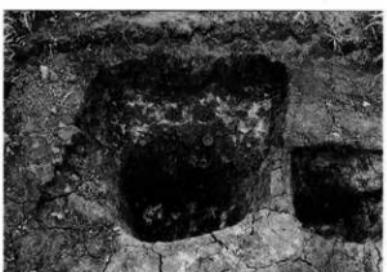
SD05 検出状況（南から）



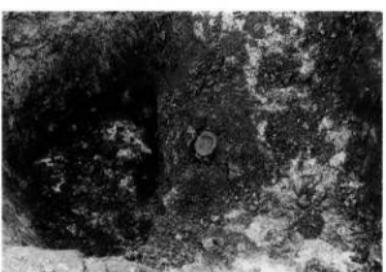
SK20 断面（南から）



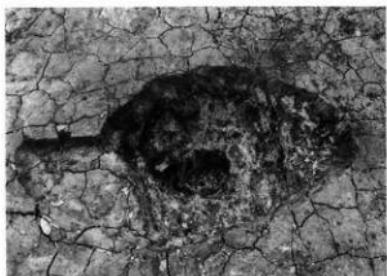
SK20 建物出土状況（東から）



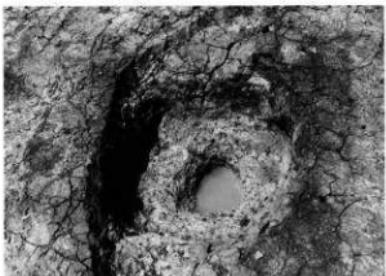
SK23 断面（西から）



SK23 遺跡出土状況（南から）



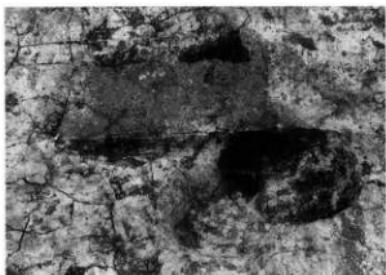
SK46 完掘（南から）



SK20 完掘（南から）



SK23 完掘（東から）



SP48 断面（南から）



SD20 完掘（北から）



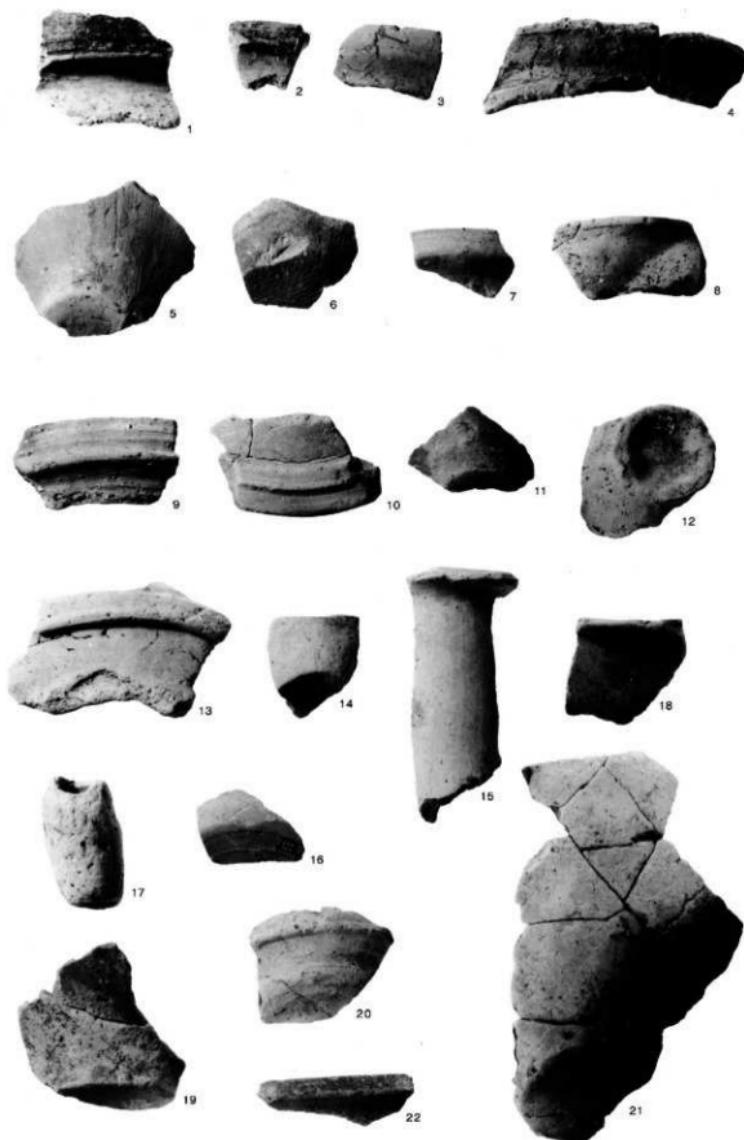
SD05 完掘（北から）



SK04 完掘（西から）



SK03 完掘（東から）



出土遺物写真

II 今市遺跡

第1章 調査の経過

第1節 調査いたる経過

今市遺跡は昭和 63 年度～平成 3 年度に富山市教育委員会が実施した分布調査で確認され富山市の遺跡地図に遺跡 No 201010 として登載された。埋蔵文化財包蔵地の面積は 3023.000 m²である。

平成 22 年 4 月 16 日、富山市寺島地内において、個人住宅建設にかかる埋蔵文化財の所在確認依頼の提出があった。建設予定地全域 365 m²が包蔵地に含まれていたため、平成 22 年 4 月 26 日に試掘調査を実施した。その結果、厚さ 18 ～ 26cm の地表下に弥生時代と中世の溝と土坑などの遺構及び弥生土器や中世土師器等の遺物を確認した。この結果を受けて工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取扱いについて協議を行ったところ、地盤改良工事が遺構面に達することから、住宅建築部分 190 m²について発掘調査を行うこととなった。

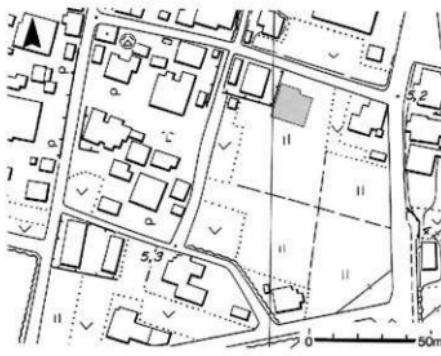


図 7 調査区位置図 (1 : 2,000)

第2節 発掘作業及び整理等作業の経過

発掘作業は平成 22 年 8 月 25 日から同年 9 月 30 日まで行なった。表土掘削は平成 22 年 8 月 25 日からバックホウを用いて行った。表土除去完了後の 26 日から人力による包含層掘削・遺構検出作業を行い、その後遺構掘削作業を開始した。遺構掘削作業と並行して測量・図面作成作業を行い、18 日には遺構掘削を終え、全景写真を撮影した。9 月 29 日にバックホウを用いて埋め戻し作業を行い、9 月 30 日調査を完了した。

遺物乾理・報告書作成作業は現地調査終了後、平成 23 年 3 月 31 日まで行った。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

今市遺跡は、呉羽丘陵の北西側に広がる射水平野東端の旧神通川旧左岸河岸段丘上、標高は 5 ～ 6 m²で、現在の神通川から西へ 2 km の距離に位置する。神通川は洪水による変遷が繰り返し生じ、万治元（1658 年）年から寛文 8（1668）年の間に本流が西から東へ大きく移っている。これがほぼ現在の流路である。西岩瀬側は神通古川と呼ばれ、次第に縮小し現在は細い流れとなっている。遺跡の北側から西側は繩文海進の後、砂州が発達して古放生津潟が出来、そこへ川が流れ込み次第に潟を埋め低湿地帯が形成された。

第2節 歴史的環境

今市遺跡は富山市今市、寺島、布目、四方荒屋、八幡、八町北、八町南、八町東、八町中地内に所在する縄文時代から近世にわたる集落遺跡である。本遺跡の周辺には、縄文時代から近世に至るまで連続とした人の営みが確認できる数多くの遺跡が存在する。本遺跡の北部には、特に弥生時代後期後半から古墳時代前期（法仏式段階～高昌式段階）という県内でも類例の少ない事例である江代割遺跡

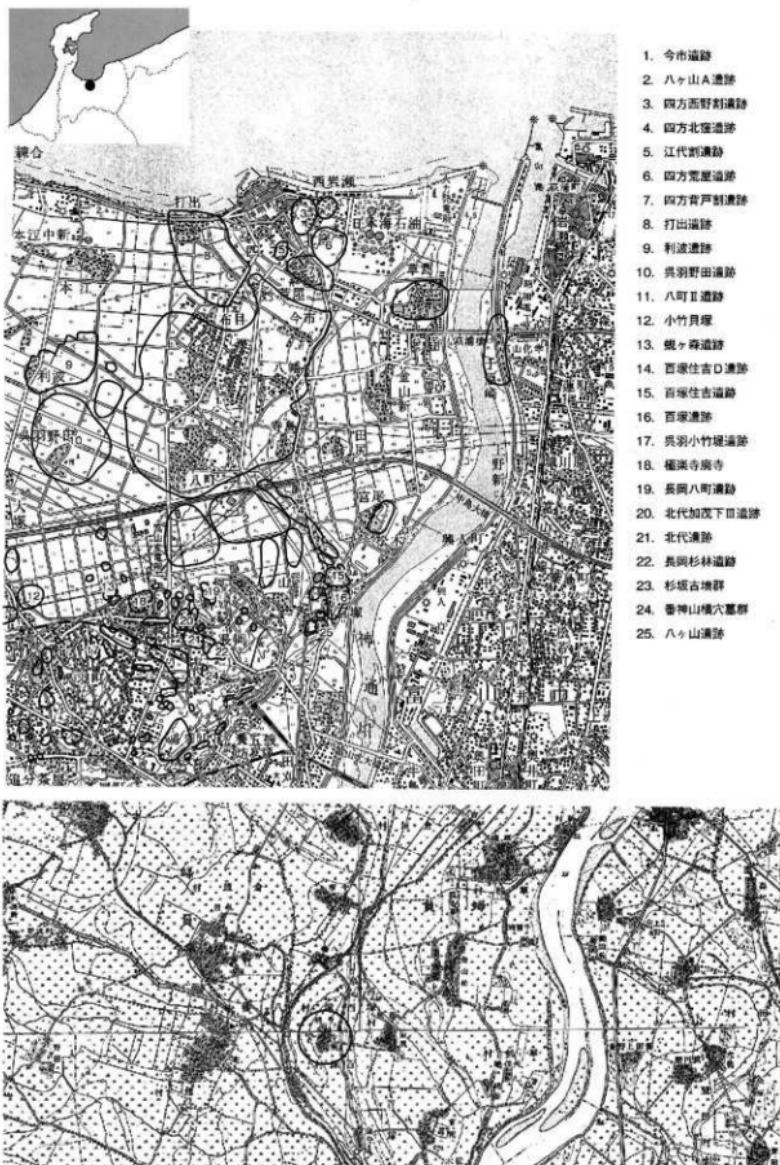


図 8 今市遺跡の遺跡の位置と周辺の遺跡 (S=1/50,000 上が北)

などが立地する。また、この遺跡を神通古川の旧河道を挟んだ対岸には縄文時代晚期～中世の遺跡である打出遺跡が存在する。これらの遺跡から見つかった遺構や遺物は海に面した集落遺跡として、また富山県下での、この時期の遺物の様相を垣間見る事のできる格好の資料となっている。また、近隣の射水市江東遺跡や高島A遺跡からは、弥生時代中期から古墳時代初頭や中世の遺構・遺物が見つかっている。とくに高島A遺跡からは低地では類例の少ない弥生時代中期の方形周溝墓が検出されており、今市遺跡周辺の弥生時代終末期から古墳時代初頭以前での放生津潟周辺の様相を解明する一助となっている。

また、百塚住吉D遺跡では古墳成立期の遺物が、百塚住吉B遺跡では古墳時代後期の土器とともに碧玉製の太形管上が採集されている。北代遺跡や呉羽小竹堤遺跡では鍛冶工房、長岡杉林遺跡では瓦塔や綠釉陶器、灰釉陶器など仏教的遺物を伴う建物跡が検出されている。

中世の遺跡については、この地が日本最古の海商法『廻船式目』貞応2年(1223)にその存在が確認できる越中岩瀬湊の関連から、多くの遺跡が確認されている。打出遺跡では鎌倉から室町時代の屋敷跡が確認された。特に四方北岸遺跡では14世紀から15世紀を中心とする珠洲の他に、天日の模倣瓦質土器が出土している。また遺構では、掘立柱建物や道路跡などの他に火葬場など、非生活空間的な色彩の強い遺構の検出にまで至っている〔富山市教育委員会2000〕。八町II遺跡では中世前期(鎌倉時代13世紀後半～14世紀)に区画溝をもつ集落が位置していたことがわかつており、この遺跡一帯は、南北朝・室町時代の京都下鴨神社領「寒江莊」に該当することや出土品のなかに千鳥紋を施した漆器があることから、この集落遺跡は鎌倉時代から高級漆器を取り寄せることのできる人々が暮らす中核的な集落であったことが指摘されている〔富山市教育委員会2008〕。さらに四方荒屋遺跡では、溝によって区画された中世の屋敷地の一端を確認するに至っており、〔富山市教育委員会1999〕また、今回発掘調査を行った寺島地区は守護代神保氏の被官であった国人寺鶴氏の出自の地と推測されている〔平凡社1994〕が、その館の位置などは分かっていないことから今市遺跡との関連が興味深いものである。(長谷部)

〈引用・参考文献〉 第1～3章共通

- 富山市教育委員会1999「富山市四方北岸遺跡発掘調査報告書」
富山市教育委員会2007「富山市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ～水鏡草光寺遺跡・宮代遺跡・般治町遺跡～」
富山市教育委員会2008「富山市八町II遺跡発掘調査報告書」
角川書店1987「角川日本地名大辞典 16巻 富山県地名大辞典」
平凡社1994「日本歴史地名体系 第16巻 富山県の地名」
珠洲市立珠洲歴史博物館1989「珠洲の名跡」
戸綱幹夫1983「能登式製塙土器－形式分類とその変遷－」『北陸の考古学』石川考古学研究会
九州近世陶磁学会2008「18回九州近世陶磁学会会員講演会 江戸後期における近民向け陶器の生産と流通(北條・甲斐編)」
酒井重洋1997「中世土器形の分類について」『昭和文化財調査概要』財団法人昭和文化振興財团
石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター2010「珠洲市大谷中学校遺跡調査」
北陸古代土器研究会1997「第15回北陸古代土器研究会例会シンポジウム 北陸の10・11世紀の土器様相」
北陸古代土器研究会1997「北陸古代土器研究 第7号」
内山直紀子2000「越中崩負郡の古代土器と煮炊具－越中町中心部I・V・VI遺跡の堅穴住居跡を中心として－」『富山考古学研究紀要第3号』財団法人富山県文化振興財团
宮田進・1997「越中国における土器の編年」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会編
久保尚文2008「山と越中富山山野川の中世史」桂吉房
吉岡英明1997「象山庄とは、そして下加茂神社は金相続社か」下村教育委員会
金龍教英1984「越中守護代神保氏と椎名氏の世界」「富山史壇」84号
吉岡弘文館
山川弘文館

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

発掘調査は、最初に表土を試掘調査の結果をふまえながら遺構検出面直上までバックホウにより掘削・除去した。表土除去完了後、ジョレンによる人力での包含層掘削、遺構検出作業を行い、遺構掘削作業と並行して測量・図面作成作業を行った。遺構は断面観察用の畦を残して掘削し、土坑や小さな溝は半截した後、断面を写真と図面に記録した。遺物が出土した遺構は、遺物出土状況写真と図面に記録した後、完掘した。測量と遺物は光波測量機器（トータルステーション）を使用して位置と高さを記録した。

図面は、平面図・断面図・遺物出土状況図とも縮尺20分の1を基本として作成した。

第2節 基本層序

調査区の基本層序は、調査区壁面を用いて観察を行った。調査区の土層は、部分的に見られる耕作等の擾乱を除き、大まかに以下の3層に分けることができる。今回の調査では、Ⅲ層上面で遺構検出を行った。同一検出面のため、遺物が出土しない遺構は時代を特定できなかった。

I層： 層厚15～25cm

II層： 層厚0～15cm

III層： (地山)

第3節 遺構 (図9・10・11、図版5・6・7・8)

調査区全体で、溝6条、土坑19基、住居跡1棟を検出した。主な遺構の概要は以下のとおりである。

1. 溝

SD01 調査区南側を東から西へ流れる。検出長14.20m、幅3.00～4.00m、深さ1.00～2.00mで、平面形は直線である。溝はI～Ⅲ期に別けられ、I期は幅3.60～4.00m、深さ2.00m溝の断面形はU字形を呈している。Ⅱ期は幅3.40～4.00m、深さ1.80mを測る。断面形はV字形の薬研堀を呈し、溝の途中には約2.50mの上橋が溝を横断していた。また、溝の南側の斜面には犬走りとみられる幅約0.60mの段が設けられている。Ⅲ期は幅3.00～3.50m深さ1.00mを測る。断面形はU字形を呈し、Ⅱ期で作られた土橋と犬走りを切っていた。

出土品をみると、I～Ⅲ期のどの時期からも吉岡康暢氏の珠洲編年で13～Ⅱ期の珠洲や中世土師器などが見つかり、特に溝のⅡ期からの出土品が多い。これらのことから、新しい段階の溝は古い段階の溝を埋めた後すぐに作られたとみられ、その時期差はない。また、Ⅲ期の層からは複数の被熱した骨片が出土している。

SD03 調査区西側を北から南へ流れる。検出長7.10m、幅0.60m、深さ0.04mで、平面形は直線である。断面は船底形を呈する。遺構埋土は単層で、南端はSD01に切られ、西端はSK01を切っている。この遺構からは中世土師器や鉄製品が出土した。

2. 土坑

SK01 平面形は楕円形である。検出長 4.40m、幅 1.20m、深さ 1.40m で、断面は U 字形を呈する。遺構埋土は 9 層で東端が SD03 に切られている。この遺構からは中世土師器、珠洲などが出土している。

3. 穴穴建物

SI01 平面形は方形である。検出長 5.60m、幅 4.90m、深さ 0.05m である。南端が SD02、SK12、SK18、SK11 に切られ、SK14 を切っており、北端が SK07、SD05 に切られている。遺構埋土は 8 層である。深さが浅く遺構の残存状況は非常に悪い。後世の削平を受け、底部のみが残っていると考えられる。また、遺構北東部の表土より 0.25m 下から掘り込んだ跡があり、そこから焼土と見られる赤褐色の硬い土や炭がみられることから、ここにカマドがあったと考えられる。
(長谷部)

遺構番号	遺構名称	走行方向	平面形態	長軸 m	短軸 m	深さ m	断面形態	出土遺物	備考
SD01	溝	N-70°-W	直線	14.2 (検出長)	3.0 ~ 4.0	1.0 ~ 2.0	U字形	珠洲・中世土師 鉄製品・石製品・ 骨 I ~ III期	
SD02	溝	N-64°-E	直線	4.8	1.2	0.20	不整形	土師器・炭化物	
SD03	溝	N-8°-E	直線	7.1 (検出長)	0.6	0.04	船底形	土師器・鉄製品	
SD04	溝	N-70°-W	直線	7.3 (検出長)	0.6	0.10	台形	土師器	
SD05	溝		曲線	0.3 (検出長)	0.8 (検出長)	0.20	不整形	土師器	赤褐色の硬い焼土混じる
SD06	溝	N-70°-E	直線	0.9 (検出長)	0.8 (検出長)	0.10	不整形	石	
SI01	住居	N-20°-E	方形	5.6	5.4 (推定長)	0.05	不整形	土師器・須恵器・ 鉄製品	
SK01	土坑		楕円?	4.4	1.2 (検出長)	1.40	U字形	土師器 須恵器	
SK03	土坑	N-20°-E	楕円	2.2 (検出長)	1.1	0.30	U字形	土師器 須恵器	
SK04	土坑		不整形	1.3	1.0	0.60	U字形	鉄製品・土師器	
SK05	土坑		不整形	1.0 (検出長)	1.9	0.05	不整形	陶器・土師器	
SK06	土坑		楕円	1.6	0.9	0.30	不整形	土師器	
SK07	土坑		楕円?	2.2 (検出長)	1.7	0.25	不整形	土師器	
SK08	土坑		楕円	1.1	0.8	0.65	U字形	—	
SK09	土坑		楕円	1.1 (検出長)	0.8 (検出長)	0.60	不整形	炭化物 土師器	
SK10	土坑		楕円	0.9	0.7	0.20	台形	土師器	
SK11	土坑		不整形	1.1	0.6	0.20	不整形	—	
SK12	土坑		不整形	0.9	0.8	0.10	不整形	—	
SK13	土坑		不整形	1.2	0.9	0.20	台形	—	
SK14	土坑		楕円	1.1 (検出長)	0.8	0.30	不整形	土師器	
SK15	土坑		楕円	1.6	0.6	0.20	不整形	—	
SK16	土坑		不整形	0.4	0.3	0.30	U字形	土師器	
SK18	土坑		楕円?	0.6	0.4 (検出長)	0.20	不整形	土師器	
SK19	土坑		楕円	0.6	0.4	0.10	U字形	土師器	

表 3 遺構一覧表

第4節 遺物 (第5・6図、図版12・13)

古墳～江戸期にかけての遺物が整理箱(60×40×10cm)に換算して3箱分出土した。各遺物の詳細については観察表を掲載した。代表的な遺物について、以下に解説を行う。

SD01 1～12は古式土師器である。1,2は口縁端部外面に面取りを行う。3は1～2mmの砂粒を多く含み、体部外面に粗いタテ刷毛を施す。8の底部外面には稻モミの厚痕が2箇所残る。いずれも古墳時代初頭の白江式に属するとみられる。13～15は須恵器である。13には内面に5cmの円形を呈する2次的な黒色被熱痕が付着する。16～19は珠洲である。17は口縁内端部が嘴状に突出する。18は方頭、19は口縁先端部で外に突出気味に仕上げている。これら片口鉢の口縁形態は吉岡康徳氏の珠洲編年でI₃～II期の様相を示す(吉岡1994)。23,24は非ロクロ成形土師器で、23は体部外面に1段ナデを施す。24は口縁端部に面取りをする。宮出進一氏の中世土師器編年II期に位置づけられる〔宮田1997〕。25は基石状の石製品で表面中央には擦り減ったへこみがある。

SK01 28～30は混入品とみられる。28は内田亜紀子氏の分類でe 2類の口縁端部が内側に折り返され、さらに口縁外面に面を取り受口状になる〔内田2000〕。鉄の鍋や釜が出現する直前の10世紀前半に位置づけられる。31～34は非ロクロ成形土師器の皿で、体部に1～2段のナデを施す。宮田編年II～III期に位置づけられる。31は内面に等間隔の指頭圧痕がみられる。35は珠洲の片口鉢で、口端内端部が嘴頭状に突出する。吉岡編年でI₃期とみられる。

SI01 36は須恵器の蓋で内面を覗として転用される。38は土師器の皿で底部を平らに削る。41は能登式製塩土器で、戸渕幹夫氏の分類で棒状尖底タイプと呼ばれるものの頸部から体部にかけての破片である〔戸渕1983〕。能登では、真脇製塩遺跡等で10世紀前半まで存在している。

その他 51は土師器甕口縁で端部が内側に折り返されるタイプのものである。54は、円盤形を呈し2箇所以上の穿孔がある七厘の部品とみられる。55は越中瀬戸の火鉢あるいは七厘の円形を呈する脚部である。58は唐津の小椀である。

(鹿島・長谷部)

番号	出土状況	目録No.	形状		寸法		内面		外側		特徴		基盤
			長	幅	高さ	横幅	縦幅	厚さ	内面	外側	内面	外側	
1	SD01	213	19.5	19.5	19.0	3.0	—	—	直	直	無	無	ナデ 内凹部有り
2	SD01	205	19.5	19.5	19.0	3.0	—	—	直	直	無	無	ナデ 内凹部有り
3	SD01	204	23.5	19.5	19.0	4.5	—	—	直	直	無	無	ナデ
4	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.0	—	—	直	直	無	無	ナデ
5	SD01	270	23.0	19.5	20.5	3.1	—	—	直	直	無	無	ナデ 内凹部有り
6	SD01	269	23.0	19.5	20.5	3.1	—	—	直	直	無	無	ナデ 内凹部有り
7	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
8	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
9	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
10	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
11	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
12	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
13	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
14	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
15	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
16	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
17	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
18	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
19	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
20	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
21	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
22	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
23	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
24	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
25	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
26	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
27	SD01	No.7	12.0	12.0	1.0	0.5	—	—	直	直	無	無	ナデ
28	SD01	No.7	21.0	21.0	21.0	4.0	—	—	直	直	無	無	ナデ
29	SD01	No.7	21.0	21.0	21.0	4.0	—	—	直	直	無	無	ナデ
30	SD01	No.7	21.0	21.0	21.0	4.0	—	—	直	直	無	無	ナデ
31	SK01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
32	SK01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
33	SK01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
34	SK01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
35	SK01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
36	SK01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
37	SK01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
38	SK01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
39	SK01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
40	SK01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
41	SI01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
42	SI01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
43	SI01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
44	SI01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
45	SI01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
46	SI01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
47	SI01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
48	SI01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
49	SI01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
50	SI01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
51	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
52	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
53	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
54	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
55	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
56	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
57	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
58	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
59	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
60	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
61	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
62	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
63	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
64	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
65	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
66	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
67	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
68	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
69	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
70	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
71	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
72	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
73	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
74	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
75	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
76	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
77	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
78	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
79	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
80	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
81	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
82	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
83	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
84	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
85	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
86	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
87	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
88	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
89	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
90	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
91	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
92	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
93	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
94	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
95	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
96	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
97	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
98	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
99	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
100	SD01	No.10	19.5	19.5	19.0	3.4	—	—	直	直	無	無	ナデ
101	SD01	No.10	19.5	1									

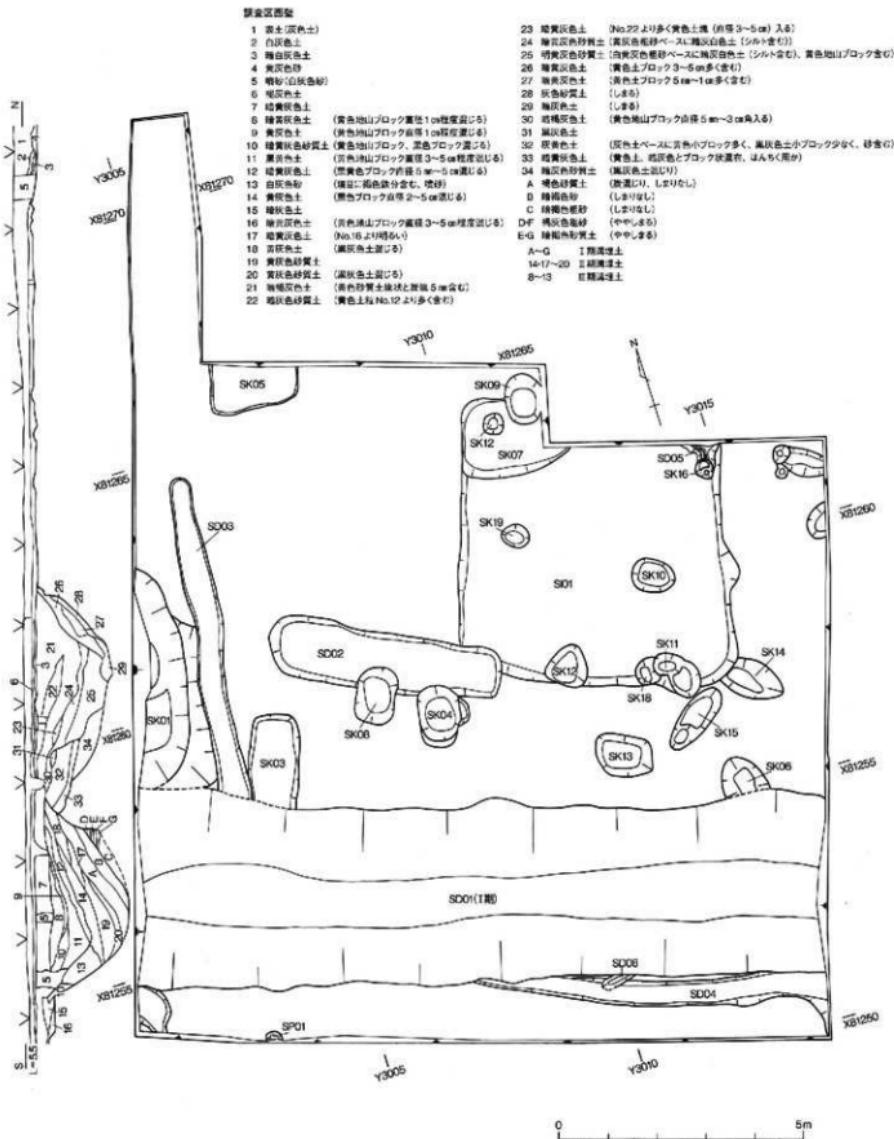


図9 調査区全体図及び調査区西壁土層図 (1/100)

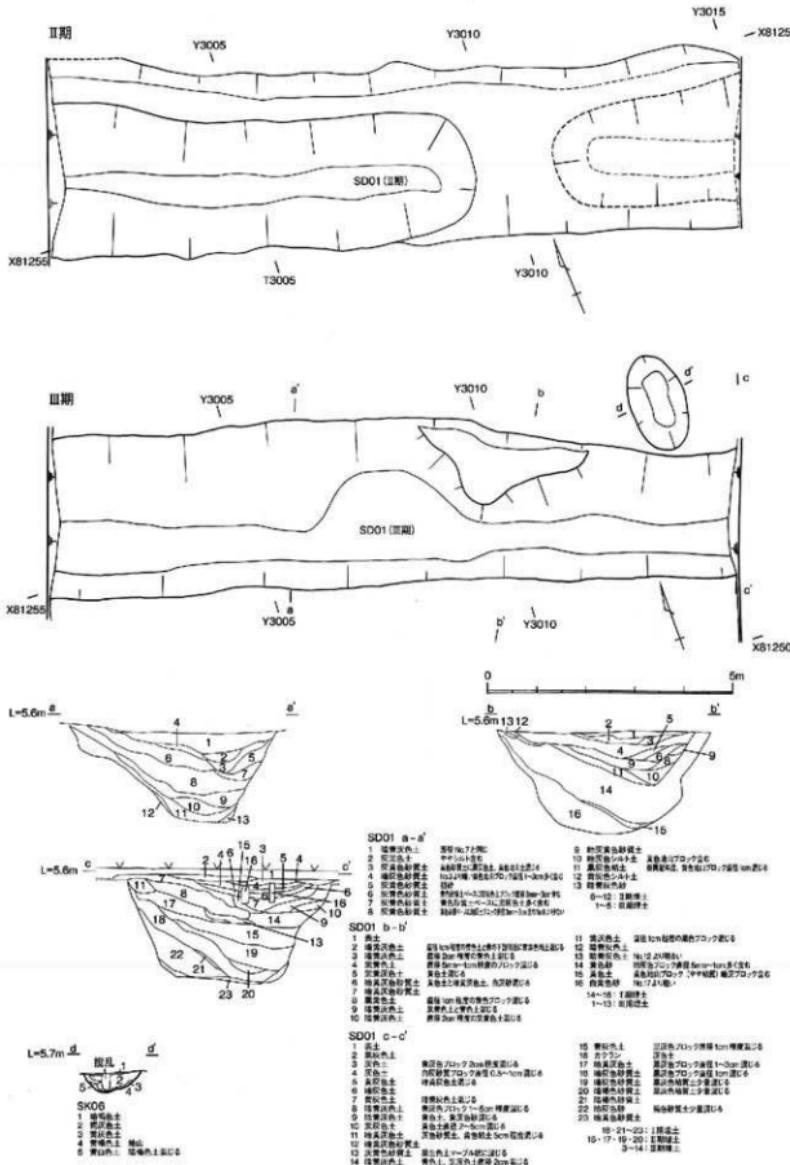


図 10 SD01 平面図及び断面図 (S=1/100) SK06 平面図及び断面図 (S=1/100)

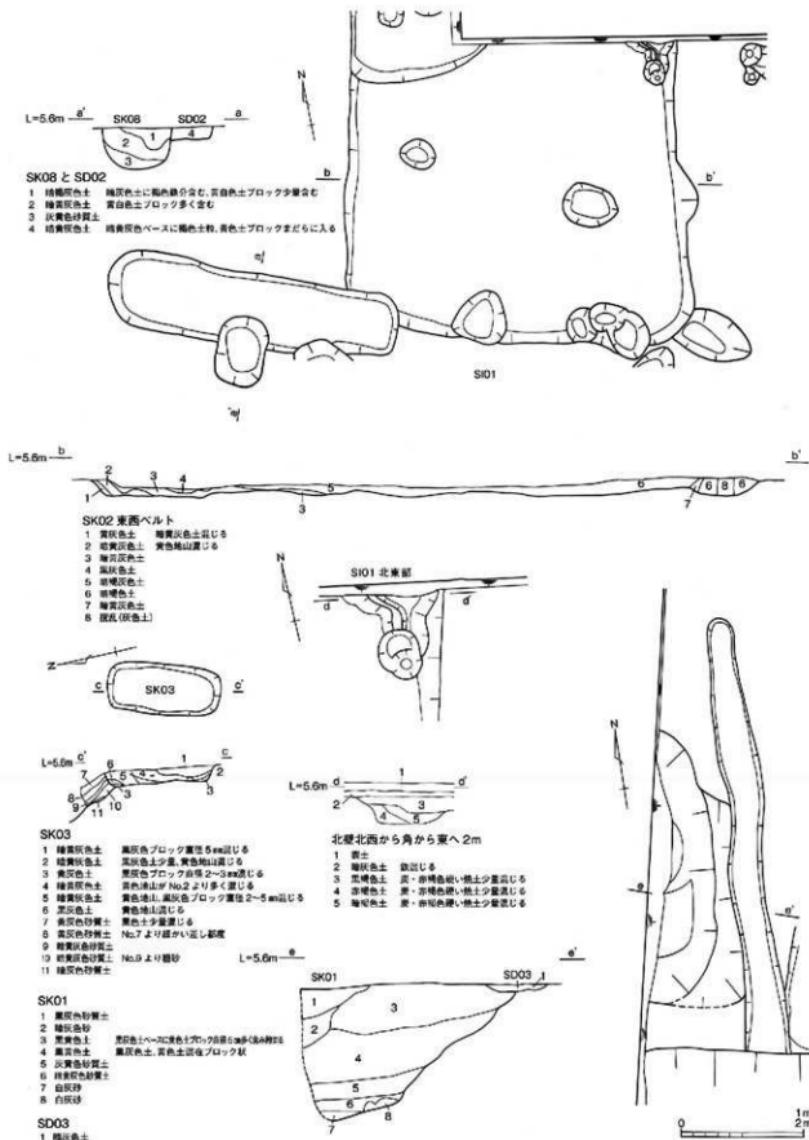


図 11 SK03 平面図、断面図 (S=1/80) SI01 北東部平面図、断面図 (S=1/40)

SK01 断面図 (S=1/40) 平面図 (S=100) SK08 と SD02 断面図 (S=1/80)

SI02 平面図 (S=1/80) 断面図 (S=1/40)

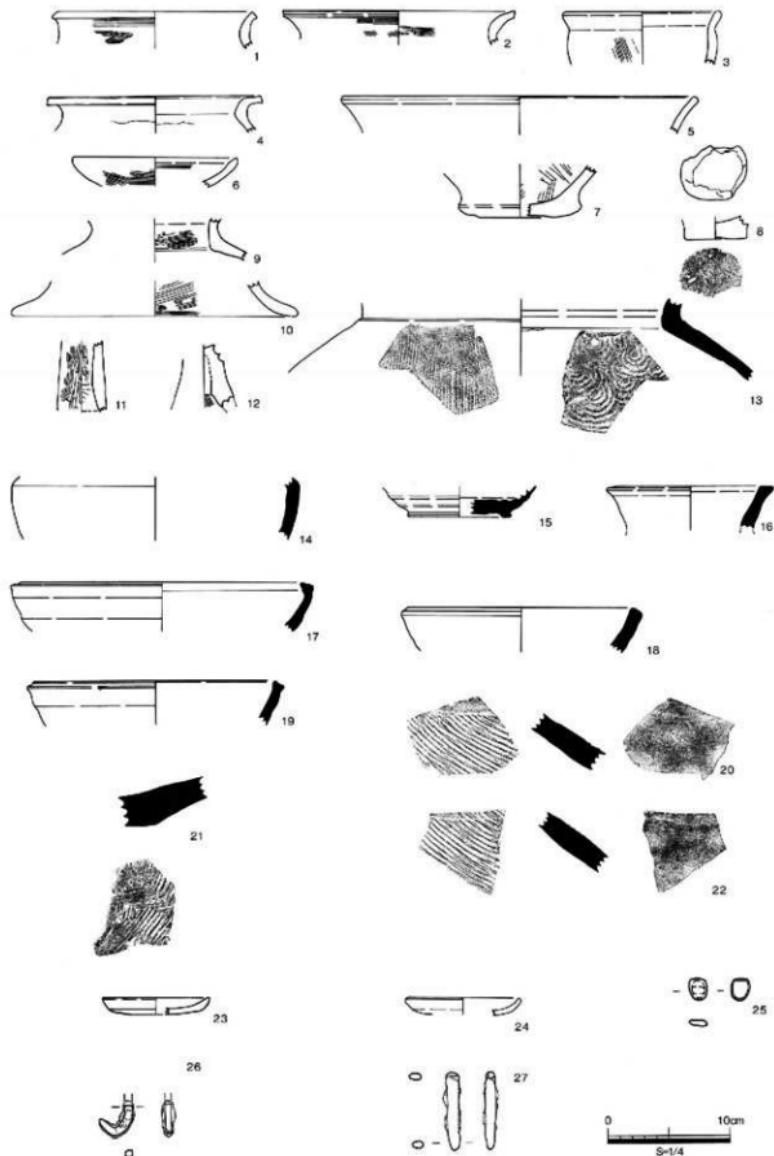


図 12 遺物実測図 (S=1/4) 1 ~ 27 : SD01

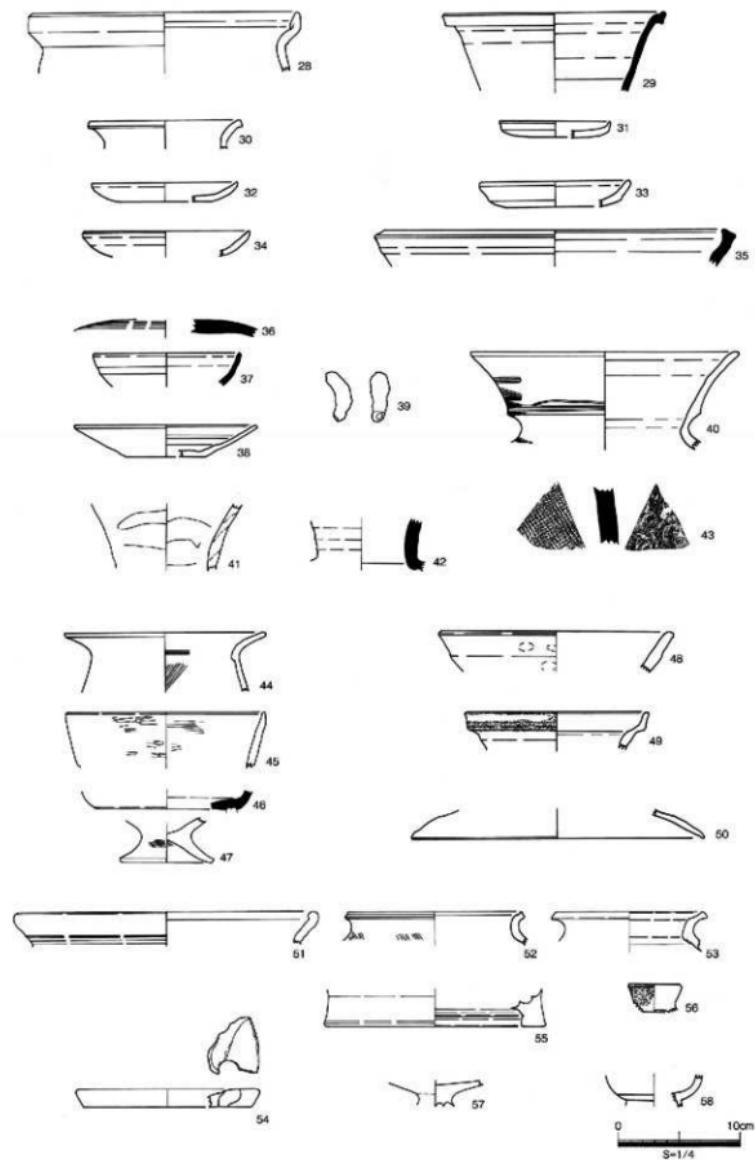


図 13 遺物実測図 (S=1/4)

28～35 : SK01 48～50 : SK03

36～43 : SI01 51～58 : その他

44～47 : SD02

第IV章 総 括

発掘調査により古墳時代～鎌倉時代にかけての遺物と、平安時代～鎌倉時代の遺構が検出された。

古代以前

古墳時代は、後世の遺構覆土中や包含層から古式土師器（白江式）が数点出土したのみである。それに伴う時期の遺構は確認できず、詳細な状況は不明である。一部、赤彩された土器も出土した。

平安時代では、須恵器・土師器が出土し、ほぼ正方形に近い形状の堅穴建物（SI01）が1棟検出された。床面積約32.7m²のやや大型の住居で、明瞭な柱穴は検出できなかった。その北東コーナー近くで炉跡とみられる焼土や袖の一部、土師器を伴う遺構を確認した。出土した土師器皿などから10世紀前半頃のものとみられる。能登式製塙土器が1点出土したことでも注目される。他にSK01覆土などから9世紀～10世紀前半にかけての須恵器や土師器片が出土した。堅穴建物 SI01 と後に形成される中世居館に伴う大溝の軸方向が共通することから、中世居館の嘴矢となる平安時代の集落が形成されていたと考えられる。

中世以降

中世では、大溝（SD01）や土坑（SK01）などから非ロクロ系の土師器皿や珠洲が出土した。

大溝（堀）は東西方向に延長13.2m分検出され、I期からIII期までの変遷を確認することができた。

I期の堀は断面U字形を呈し、最大の規模を測る。堀底の高低差が調査区東端と西端で0.02mしかない。また、堀底に近くなるに連れて、地山はきめの細かい砂質となるため、水を湛えていた堀ではなく、空堀であった可能性が高い。堀底には所々シルト質の土が薄く敷かれており、砂質で崩れやすい堀の形状を保つ必要性があったと推測される。土壘は検出されていない。

II期の堀では、堀の南北にあったとみられる郭を繋いだ土橋や堀の北斜面に犬走りの段が形成された。土橋や犬走りは地山と同じ黄色砂質土で形成されている。I期同様、土壘は検出されていない。土橋によって、堀が東西に分断されていた。この段階では、I期の角度のある南斜面はそのまま利用し、犬走りの段の斜面は南斜面より緩やかな傾斜となる。また、堀底はV字形を呈する薬研堀（片方の斜面が緩やかなため、片薬研となる）に変化する。

III期の堀では、II期に形成された土橋を掘り込んで、やや深い溝が掘られる。この溝も底部は緩やかなV字形を呈する。

堀からの出土品は、古い遺物の混入がみられるが、12世紀後半～13世紀を中心とした時期と推測される。

寺島館跡

今回の調査区の周辺をみると、南西約1.5Km離れた八町II遺跡A～C地区では中世前期（鎌倉時代、13世紀後半～14世紀）の区画溝を有する集落が存在していた。同遺跡は、京都下鴨社領荘園「寒江荘」との関連が注目されている。また、本調査区の北北西約2Kmの旧神通古川の自然堤防上には打出遺跡があり、13世紀から14世紀にかけての集落が確認されている。打出遺跡は、15世紀や16世紀にも集落が形成されており、室町時代に公家冷泉為広が越後に下向した際に書かれた『越後下向日記』に登場する、「ウチデ里」との関連が注目されている。

その一方で、今回の調査区を含む寺島地区は、神保氏の被官となる国人寺崎氏の出自の地とされるが、文献上に現れるのは15世紀後半まで下ることになり、検出された遺構や遺物とは時期差が大きく開く。

今回みつかった堀や土橋、犬走りなど中世城館に伴う遺構は、12世紀後半～13世紀を中心とした鎌倉時代に遡り、県内でも早い時期に形成された城館遺構である。当該時期、調査地が位置する射水平野東部は京都加茂社領荘園「倉垣荘」が設立される。射水市加茂神社はその總社とされ、その北側では、下村加茂遺跡が発掘され、13世紀～14世紀前半の有力者の館跡、あるいは弘仁・元暦の創建とされる真言宗福王寺が近くにあるため、検出された屋敷地は寺院である可能性も指摘されている。

さらに、神通川や支流の井田川流域に富山市婦中町小倉中稻遺跡や任海宮田遺跡に同時期の集落が形成される。これらは、徳大寺家領莊園「宮河荘」との関連が指摘されている。このように、中世前期に位置づけられる集落遺跡は、当該期に設立された莊園との関係で説明されることが多い。今回発掘された1期の堀は耕作地への灌漑用の大規模な水路の可能性もあり、その管理施設が存在していたことも推測される。しかし、それほど時間をおかず、Ⅱ期には堀が分断される土橋が築かれ、水路としての機能は断たれる。

今回の調査区で確認された堀など中世前期に位置づけられる遺構からの出土遺物は、遺構の規模に比べて極めて少ない。莊園領主が現地に置いた莊官など有力者が居館を営んでいた場所としてはやや物足りない。また、平安時代末～鎌倉時代の限られた期間内に、堀を3度も造り直すなどの行為も、この場所が、當時は生活の場としては使用されず、何か事態が発生した際に、城館として機能をしていた可能性を示唆しているのではないか。平氏政権下から源平の争乱を経て源氏政権へと時代が移り変わる際に、越中国でも多くの在地領主や国人とよばれた越中武士団が活躍した。後の室町期に国人寺島氏を輩出した可能性のある土地で、その嘴矢となる勢力がこの地を基盤に城館を築いたことが推測される。

調査地が位置する寺島地区は、呉羽丘陵北端の東西を神通川の旧河道に挟まれた中州状の段丘上に位置する。その中でも、調査地は、法務局が所有する明治以前の旧地割図でみると旧字名が「高田」に立地し、河岸段丘上の微高地に城館が営まれていた。射水平野や富山平野を一望でき、後に「浜街道」と呼ばれた東西に延びる海沿いの街道と神通川を利用した南北に延びる河川交通が交わる要衝に位置する。残念ながら、旧地割図の字名からは、その性格を読み取れるような情報は得られなかった。

その一方で、本調査地は、埋蔵文化財包蔵地「今市遺跡」内に位置するが、今回検出された堀と旧地割図から読み取れる旧地形のうち、東西60m、南北100mの範囲を「寺島館跡」と呼称するものとする。



図14 寺島地区的旧地割図にみえる字割り(左、約1万分の1)と字高田、柳内、地蔵堂の一部の旧地割図(右)



米軍撮影（昭和 21 年 6 月 22 日）▼の交点が調査地



遠景（南から）



造構検出状況（南東から）



SD01 II期満遺物出土状況（東から）



SD01 土橋付近（西から）



SD01 堀断面、埴砂の様子（東から）



SD01 下部遺物出土状況



SD01 断面図



SD01 I期満完掘（東から）



SD01 土橋土層断面 (東から)



SD01 土橋断面・犬走り (東から)



SK03 土層断面 (東から)



SK03 完掘 (東から)



SD03 完掘 (南から)



SK1 遺物出土状況 (北から)



SK01 断面 (東から)



SI01 断面 (南東から)



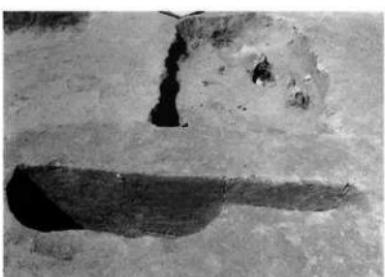
カマド断面 (南から)



SI01 完掘 (東から)



カマド検出状況 (西から)



SK08,SD02 切り合い (北から)



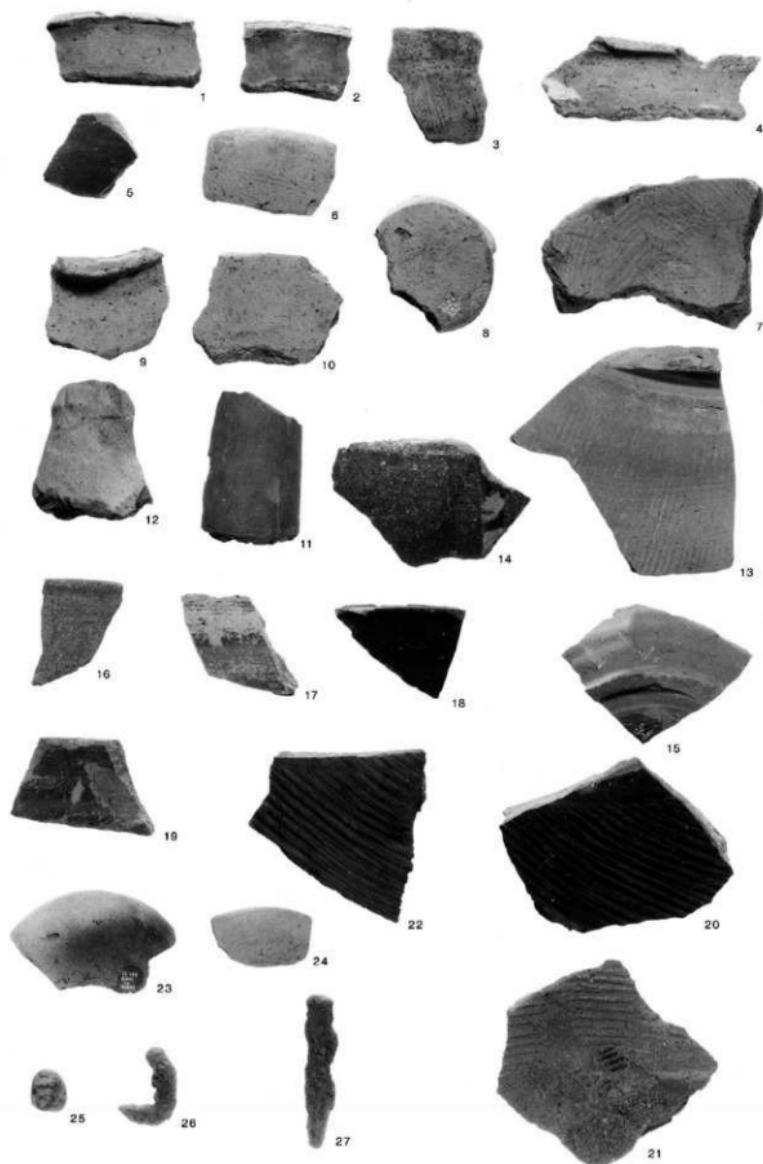
SD02,SK08,SK04 完掘 (東から)



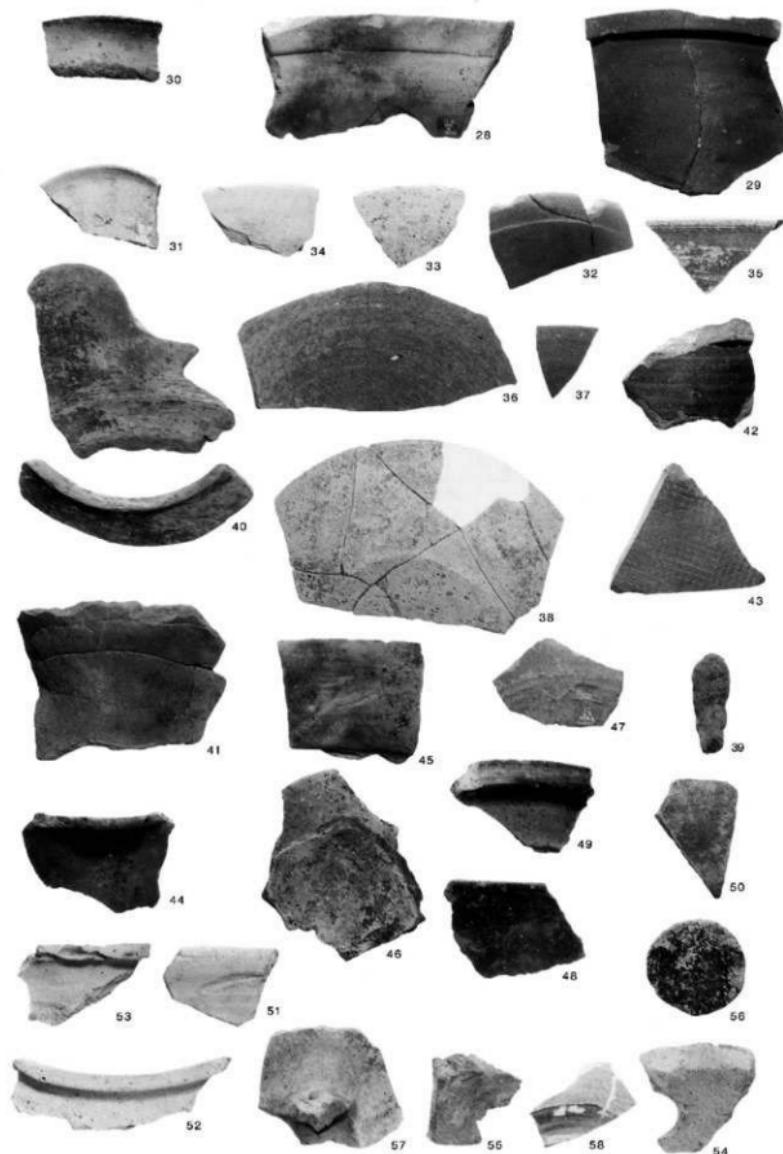
SK05 (南から)



SK06 完掘 (南から)



出土遺物 (S=1/2)



出土遺物 (S=1/2)

報告書抄録

ふりがな		とやましないいせきはっくつちょうさがいよう 二						
書名		富山市内遺跡発掘調査概要 V						
副書名		砂川カタダ遺跡・今市遺跡						
シリーズ名		富山市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号		44						
編著者名		鹿島昌也・細辻嘉門・長谷部真吾						
編集機関		富山市教育委員会 埋蔵文化財センター						
編集機関住所		〒930-0091 富山市愛宕町1丁目2-24 TEL. 076-442-4246						
発行年月日		西暦 2011年3月31日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
砂川カタダ遺跡	富山市東老田地内	市町村 16201	遺跡番号 201284	36度 42分 16秒	137度 8分 17秒	半成22年6月23日 ～7月16日	144.6	個人住宅 建築
今市遺跡	富山市寺島地内	16201	201010	36度 7分 35秒	137度 19分 7秒	平成22年8月25日 ～9月30日	190	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
砂川カタダ遺跡	集落	弥生時代後期 後半～末期	溝・土坑・ピット	弥生土器				
		奈良・平安	土坑	土師器・須恵器・土錐				
要約		- 弥生時代・古代の遺構を検出した。 - 弥生時代の遺構は溝・土坑・ピットがある。時期はおおむね弥生時代後期後半～終末期に帰属する。SD 02は、平面形は縫の手状あるいはS字状に屈曲している。東から西に向かって深くなっている。特殊な用途に掘られた可能性もある。 - SK 20・SK 23・SK 46は3基とも同じ規模・堆積であるが、柱間がSK 20・SK 23間4.7m、SK 20・SK 46間2.4mと離れており、掘立柱建物など関連する遺構の可能性は低いと推測される。 今回の調査では、過去の調査に続き弥生・古代集落を構成していた遺構を明らかにすることができた。						
今市遺跡	集落	古墳時代		土師器				
		古代	堅穴建物	土師器・須恵器・製塙土器				
		中世	溝・土坑	土師器・珠洲・鉄製品・石製品				
		近世		唐津・越中瀬戸				
要約		- 古代の堅穴建物からカマドを検出した。 - 今回の調査では、調査区の南寄りで中世の館の堀と見られる溝を検出した。東西方向に延長13.2m、幅1.8mで、深さは1.6mの規模がある。溝はⅠ期～Ⅲ期に分かれる。Ⅰ期はU字形である。Ⅱ期はV字形の妻垣を呈し、溝の途中には約2.5mの土橋が溝を横断している。また、溝の両側の斜面には犬走りとみられる幅約0.6mの段が設けられている。Ⅲ期はU字形を呈し、Ⅱ期で作られた土橋と犬走りを切っていた。 - 今回見つかった堀や土橋、犬走りなど中世城館に伴う遺構は、12世紀後半～13世紀を中心とした鎌倉時代に遡り、県内でも早い時期に形成された城館遺構である。						

富山市埋蔵文化財調査報告 44

富山市内遺跡発掘調査概要V

—砂川カタダ遺跡・今市遺跡—

発行日：2011（平成 23）年 3 月 31 日

発 行：富山市教育委員会

編 集：富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0091

富山市愛宕町1丁目2番24号

T E L : 076-442-4246

F A X : 076-442-5810

Email : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

印 刷：株式会社 サカイ印刷

